

看護師の感情労働とバーンアウトに対して心理的柔軟性が持つ機能

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
堀内 悠

看護師にとって、バーンアウトは深刻な問題であるものの、バーンアウトを低減する有効なアプローチに関してはあまり明らかになっていない。近年、いくつかの研究によると、心理的柔軟性がバーンアウトの低減に有効である可能性が示唆されている。本研究では、心理的柔軟性が感情労働とバーンアウトの関係に対してどのように機能するのか、そして心理的柔軟性のどの側面がバーンアウトに影響するのかについて検証する。本調査研究は、六つの病院に勤務する看護師を対象に実施した。調査項目は、日本版バーンアウト尺度、感情労働尺度日本語版、日本語版 **Mindful Attention Awareness Scale**、日本語版 **Acceptance and Action Questionnaire-II**、改訂日本語版 **Cognitive Fusion Questionnaire**、価値のブルズアイとした。調査から得られたデータ ($n=132$) はパス解析によって分析した。パス解析の結果から、心理的柔軟性のいくつかの要素が看護師のバーンアウトに影響を与え、さらに心理的柔軟性が感情労働とバーンアウトの関係を部分的に調整する可能性が示唆された。本研究の結果は、看護師のバーンアウト低減に対して有効なアプローチを開発する一助となるだろう。